



## 2022年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

### 今後の見通し(2022年11月～2023年3月)のポイント

#### 海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「**平年並み**」で経過する。  
※引用符「」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。  
「**平年並み**」：約2年に1回程度の発生頻度

#### 漁況(来遊水準)

- (1) マアジ：東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を上回る。  
日本海は前年並みで、平年を下回る。
- (2) マサバ：東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域は前年を上回り、平年並み。  
日本海は前年を上回り、平年並み。
- (3) ゴマサバ：東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域は前年を上回り、平年並み。
- (4) マイワシ：東シナ海は前年を下回り、平年並み。日本海は前年並みで、平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ：東シナ海は前年・平年を下回る。
- (6) カタクチイワシ：東シナ海は前年を上回り、平年を下回る。  
※「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。  
※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門(横浜) 上原

漁況：浮魚資源部(長崎) 大下、高橋

海況：海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話：095-860-1600(長崎)、ファックス：095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

# 予報対象海域

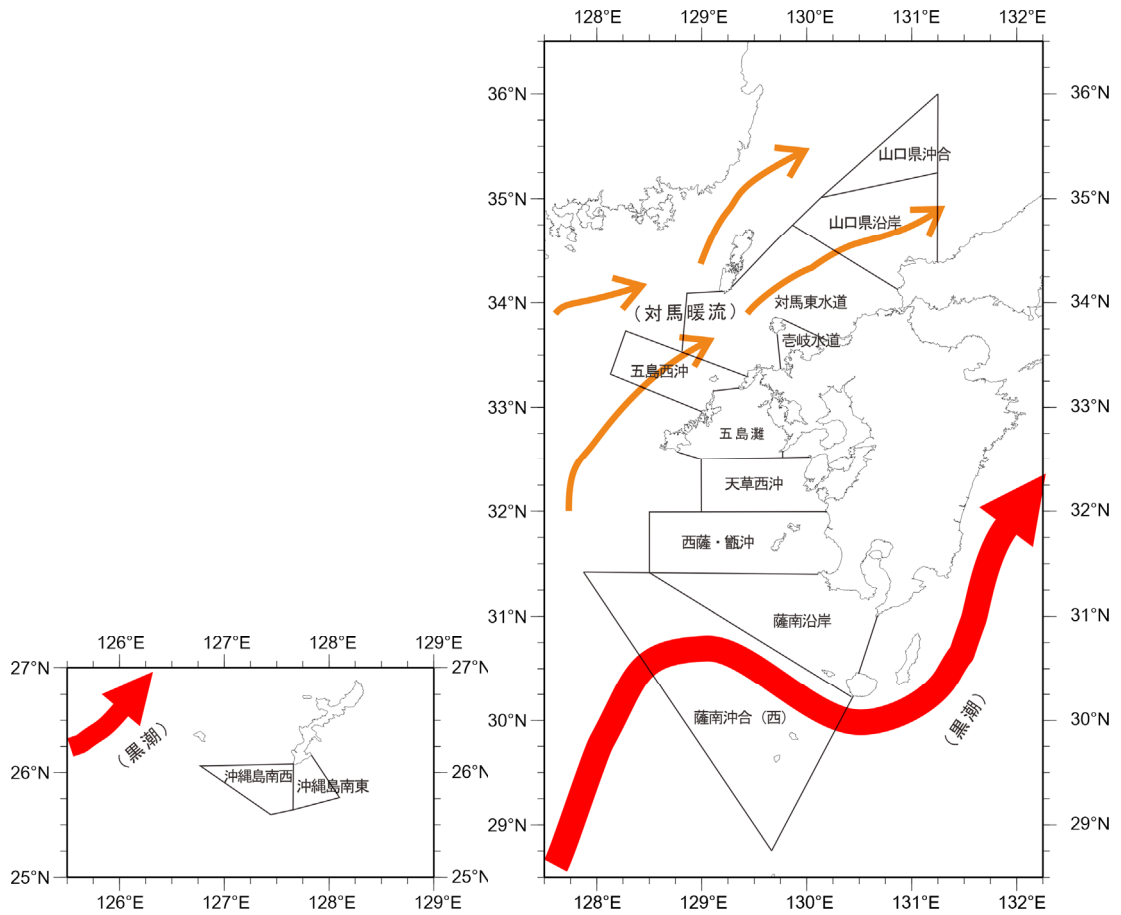


図1. 海況 (沿岸)

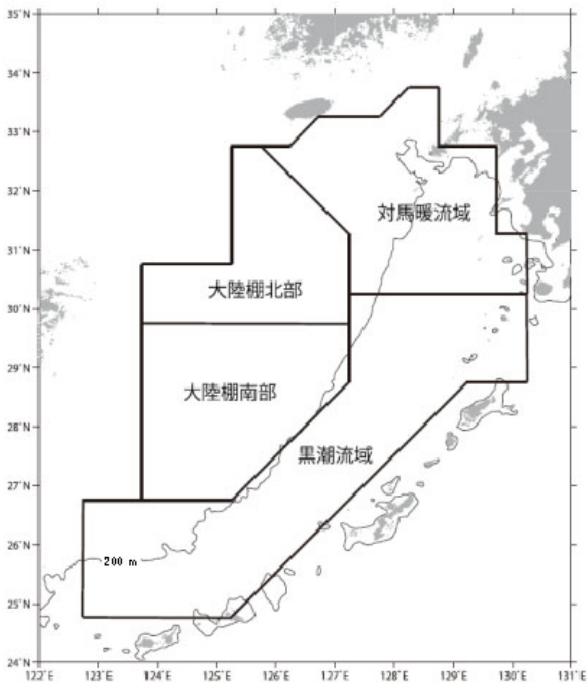


図2. 海況 (沖合)

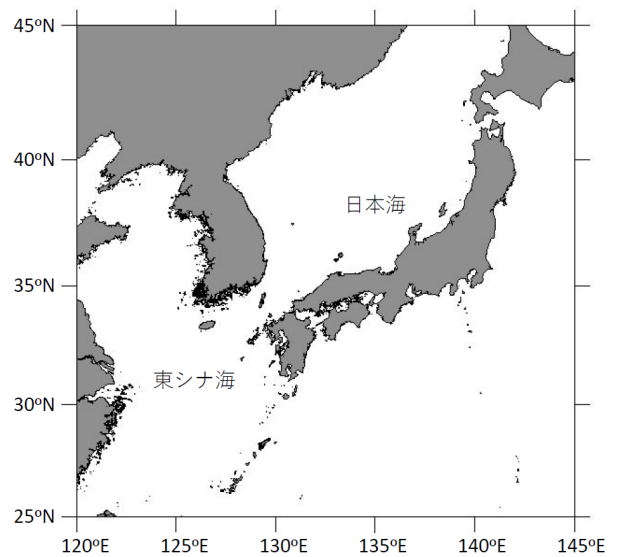


図3. 漁況。東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域。日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

# 西海ブロック海況予報

## 1. 今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

### (2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甕沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は「平年並み」で経過する。

## 2. 経過（2022年4月～10月）

### 1. 大陸棚上

#### (1) 海面水温

北部：4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、7・8月「かなり高め」、9月「やや低め」。

南部：4月「かなり高め」、5月「平年並み」、6月「かなり低め」、7月「やや高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

### 2. 黒潮流域

#### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4・5月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、6月は「離岸傾向」、7月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、8月は「離岸傾向」、9月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

#### (2) 海面水温

4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

### 3. 対馬暖流域・沿岸域

#### (1) 表層水温

山口県沖合：4月「やや高め」、5月～7月「かなり高め」、8月「平年並み」、10月「かなり高め」。

山口県沿岸：4月～6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「平年並み」、10月「やや高め」。

対馬東水道：4月「やや高め」、5月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「やや高め」。

壱岐水道：4月～6月「やや高め」、7月「かなり高め」、9・10月「平年並み」。

五島西沖：4月「かなり高め」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。

五島灘：4・6月「やや高め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」、10月「平年並み」。

西薩・甕沖：4月「平年並み」、5・8月「やや高め」。

薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沖合：4月「やや高め」、5月「平年並み」、8月「やや高め」。

沖縄島南東：4月「やや低め」、6月～8月「平年並み」、10月「かなり高め」。

沖縄島南西：4月「平年並み」、6月「やや低め」、7・8月「平年並み」、10月「かなり高め」。

#### (2) 表層塩分

山口県沖合：4月「かなり低め」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「かなり低め」、10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「かなり低め」、5月～7月「平年並み」、8月「かなり低め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「やや低め」、9・10月「平年並み」。

壱岐水道：4・5月「平年並み」、6月「やや高め」、7・9月「平年並み」、10月「やや低め」。

五島西沖：4・6月「平年並み」、8月「やや低め」。

五島灘：4・6・8月「平年並み」。

天草西沖 : 4月～6月「平年並み」、8月「やや低め」、10月「平年並み」。  
西薩・甑沖 : 4・5月「平年並み」、8月「やや低め」。  
薩南沿岸 : 4月「平年並み」、5・8月「かなり低め」。  
薩南沖合 : 4月「やや低め」、5月「かなり低め」、8月「平年並み」。  
沖縄島南東 : 4月「平年並み」、6月「かなり低め」、7・8月「はなはだ低め」、10月「平年並み」。  
沖縄島南西 : 4月「平年並み」、6月「やや低め」、7・8月「はなはだ低め」、10月「かなり低め」。

### 3. 現況 (2022年10月中旬)

#### 1. 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「平年並み」。

#### 2. 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「平年並み」。

#### 3. 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度  
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度  
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度  
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

## マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。  
魚の大きさは尾叉長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：10～16cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および16～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年から2012年にかけてゆるやかに減少し、2012年は34万トンだった。2013年～2019年は35万～40万トンで推移し、2021年の資源量は39万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2022年4月～8月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中・南部であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は2万トンで前年（2021年4月～8月、1万6千トン）、平年（過去5年の平均値、1万7千トン）を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚であった。

## (2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を上回り、平年を下回った（表2）。漁獲の主体は20～25cmの2歳魚、12～20cmの1歳魚であった。

## 3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群を下回り、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の豊度の評価は難しいが、新規加入量調査などから判断すると2021年級群を上回るとみられる。

### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。0歳魚の年級豊度は前年を上回り、1歳魚は前年並み、2歳魚は前年を下回るとみられることから、全体としては前年並みとみられる。年級豊度が前年並みであることを反映して、沖合域は前年・平年並み、沿岸域では前年並みで平年を上回ると考えられる。

### (2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。全体の年級豊度が前年並みであることから、来遊量は低調だった前年並みで平年を下回ると考えられる。

## マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。  
魚の大きさは尾叉長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年を上回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）及び28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年を上回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）及び28～32cmの1歳魚（小銘柄）に加えて、32cm以上の2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲される。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。しかし、加入が減少した2020年の資源量は34万トンと推定されている（なお、2022年度の資源評価は2022年12月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初頭に15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2018年は15万トンと多かったが、2019年は10万トン、2020年は8万トンに減少した。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2022年4月～8月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は8千トンで前年（9千トン）並みで、平年（1万トン）を下回った。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年・平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は4月は26～40cmの1歳魚以上で、5月以降は25cm以下の0歳魚がそれに加わった。

## (2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は26cm以上の1歳魚以上で、7月以降は25cm以下の0歳魚が加わった。

## 3. 今後の見通し

資源評価結果や2019年から2021年前半にかけての不漁から判断すると、2020年級群の豊度は低かった2019年級群並みとみられる。2021年秋以降の漁況から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群を上回るとみられる。2022年級群の評価は現段階では難しいが、卵稚仔調査などから判断して、2021年級群並みとみられる。

### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度がそれぞれ前年並みと前年を上回るとみられることや、直近の漁況から判断して、沖合域の来遊量は前年・平年並み、沿岸域の来遊量は低調だった前年を上回り、平年並みと考えられる。

### (2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）に加えて、2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲の対象となる。各年級の豊度から全体としては前年並みとみられるが、2022年4月～8月の漁況は好調であることを反映して、11月～3月期の来遊量は低調だった前年を上回り、平年並みと考えられる。



## ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

- (1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年を上回り、平年並み。
- (2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、対馬沖、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。
- (3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では20～35cmの0歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、2015年以降増加傾向にあり、2018年の資源量は21万トンであったが、2019年に9万トンに減少し、2020年は9万トンであった（なお、2022年度の資源評価は2022年12月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2020年は1973年以降で過去最低の1万8千トンであった。

### 2. 漁況の経過

2022年4月～8月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と五島灘・薩南であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は8千トンで前年（9千トン）並みで、平年（1万トン）を下回った。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年・平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は25cm以下の0歳魚と28～40cmの1歳魚以上であった。

### 3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2020年級群の豊度は低かった2019年級群を上回り、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の評価は現段階では難しいが、卵稚仔調査などから判断して、2021年級群並みとみられる。

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。沿岸域では2歳魚以上（小銘柄以上）も漁獲される。漁獲量の大半を占める0歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。沿岸域の来遊量は2022年4月以降の漁況から判断して、低調だった前年を上回り、平年並みと考えられる。

## マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

### 1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：14～17cmの0歳魚（小・中羽銘柄）主体に、18～22cmの1歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

### 2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部、後半に日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小・中羽銘柄）に加えて、18～23cmの1歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万4千トンとなった。その後は横ばい傾向にあり、2021年は5万5千トンであった。

### 2. 漁況の経過

#### (1) 東シナ海

2022年4月～8月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。海域別に見ると、長崎県・佐賀県では前年・平年を大きく上回ったが、その他の県において前年・平年を下回った。漁獲の主体は15cm以下の0歳魚であった。

#### (2) 日本海

2022年4月～8月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を下回り、平年並みであった（表2）。海域別に見ると、山陰沖を中心とする日本海西部では前年・平年を上回ったが、能登半島よりも北の日本海北部では前年・平年を下回った。漁獲の主体は16～22cmの1～3歳魚と15cm以下の0歳魚であった。

### 3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群よりも大きく、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の評価は難しいが、卵稚仔調査から判断すると2021年級群並みとみられる。

#### (1) 東シナ海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。東シナ海の漁況を決定する要因は、年級群豊度だけでなく冬季における対馬暖流勢力も東シナ海漁場への来遊に影響すると考えられ、冬季の対馬暖流勢力が強い年には当歳魚や産卵親魚の南下回遊が妨げられて漁獲量が少なくなる傾向にある。今冬（12月）の対馬暖流勢力は比較的強いことが予測されているため、東シナ海における来遊量は、比較的多かった前年を下回り、平年並みと考えられる。

#### (2) 日本海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に漁獲される1・2歳の成魚の来遊量の多寡が漁期を通じた漁獲量に強く影響している。年級豊度を考慮すると、漁期後半における来遊量を構成する1・2歳魚（2021・2020年級群）の豊度は前年同期の1・2歳魚（2020・2019年級群）並みかそれよりも大きいと考えられることから、日本海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

## ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。  
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年～1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年の2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後、減少して2021年の資源量は9万4千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976年～1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年以降の漁獲量は3万1千～3万9千トンの間で変動し、2020年は2万トンと大きく減少したが、2021年は3万4千トンとなった。

### 2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。4月～5月までの漁獲の主体は3～7cmの0歳魚および15～25cmの1・2歳魚であり、6月以降は18～23cmの1・2歳魚であった。

### 3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2022年4月～7月の漁況の経過や中層トロール調査の結果から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群を下回ると考えられる。2022年級群の評価は難しいが、長崎県・熊本県における2022年8月の漁獲状況や卵稚仔調査の結果から判断すると、2022年級群の豊度は2021年級群を下回ると考えられる。したがって、東シナ海における来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

## カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年11月～2023年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））・1歳魚（2021年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年を上回り、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県及び長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2021年11月～2022年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2022年4月～8月）および見通し（2022年11月～2023年3月）についての説明

### 1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったがその後減少し、2021年には10万4千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年～2015年に増加して6万1千トンとなった。2016年以降は減少傾向にあり2021年には4万1千トンとなった。

### 2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は不漁であった前年並みで平年を下回った（表1）。漁獲の主体は4月～6月には8～9cmの1歳魚であったが、7月～8月には3～6cmの0歳魚となった。

### 3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となり、1歳魚（大羽銘柄）が混じる。2022年7月～8月の漁獲量は低い水準で経過したものの、直近の漁況などから判断すると、2022年級春季発生群の豊度は不漁であった2021年を上回ると考えられる。2022年級秋季発生群の豊度の評価は難しいが、2021年級群の秋期発生群と同程度とみなして直近の漁況を考慮すると、東シナ海における来遊量は不漁であった前年を上回り、平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2022年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	主要4港のまき網では、マアジ豆・小(2021年級群)主体に、男女群島、甑東、串木野沖でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は1,395トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比113%、平年比152%)。		主要4港のまき網では、ゴマサバ中、中小(2016～2019年級群)、豆(2022年級)主体で、馬毛島、屋久島南、津倉瀬でまとまって漁獲された。マサバは中小、小(2019～2020年級群)主体で開聞沖、内之浦沖、男女群島でまとまった漁獲があった。まき網によるさば類の漁獲量は5,114トンで、前年並みで、平年を下回った(前年比96%、平年比64%)。なお、枕崎港の中型まき網によるゴマサバの漁獲量は1,862トンで、前年・平年を下回った(前年比67%、平年比68%)。
熊本 牛深港	漁獲量は113トンで、前年・平年を上回った(前年比166%、平年比182%)。	漁獲量は1,533トンで、前年・平年を上回った(前年比296%、平年比294%)。	
長崎	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った(前年比118%、平年比124%)。	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った(前年比111%、平年比158%)。	
佐賀	漁獲量は44トンで、前年・平年を下回った(前年比32%、平年比33%)。	漁獲量は14トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比227%、平年比86%)。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は239トンで、前年・平年を下回った(前年比54%、平年比62%)。漁獲のうち、中・小銘柄が22%、ゼンゴ銘柄が56%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は3トンで、前年・平年を下回った(前年比25%、平年比38%)。	代表港中型まき網漁獲量は406トンで、前年並みで、平年を上回った(前年比86%、平年比141%)。漁獲のうち、中・小銘柄が32%、マメ銘柄が68%であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は18トンで、前年・平年を上回った(前年比998%、平年比324%)。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は716トンで、前年・平年を下回った(前年比68%、平年比68%)。	中型まき網漁業の漁獲量は4,404トンで、前年・平年を上回った(前年比912%、平年比629%)。	

注：「前年」は2021年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。鹿児島県のゴマサバの漁況経過にはマサバの記述も含む。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網では、漁場は形成されなかった。まき網による漁獲量は8トンで、前年・平年を下回った（前年比25%、平年比3%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は24トンで、前年・平年を下回った（前年比43%、平年比43%）。	主要4港のまき網では、4月～6月に中羽～大羽（2021年級群）主体に開門沖、立目崎沖、内之浦沖、8月に甑下、野間池沖で漁獲された。まき網による漁獲量は473トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比146%、平年比45%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は814トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比167%、平年比100%）。	主要4港のまき網では、期間を通して中羽～大羽（2021年級群）主体に、八代海でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は583トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比212%、平年比45%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は219トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比227%、平年比64%）。
熊本 牛深港	漁獲量は12トンで、前年・平年を下回った（前年比4%、平年比9%）。	漁獲量は635トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比57%、平年比94%）。	漁獲量は1,747トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比101%、平年比65%）。
長崎	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比1,236%、平年比855%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比47%、平年比75%）。	地域により差があるが、前年を上回り、平年を下回った（前年比129%、平年比69%）。
佐賀	漁獲量は0.4トンで、前年・平年を上回った（前年比467%、平年比292%）。	漁獲量は0.05トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比100%、平年比17%）。	漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比20%、平年比9%）。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は9トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比51%、平年比112%）。棒受網の漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は143トンで、前年・平年を上回った（前年比537%、平年比832%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は8トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比48%、平年比225%）。 湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は1トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年を下回った（平年比9%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は大羽主体に22トンで、前年・平年を上回った（前年比1,458%、平年比149%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小羽・中羽主体に308トンで、前年・平年を下回った（前年比50%、平年比63%）。

注：「前年」は2021年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

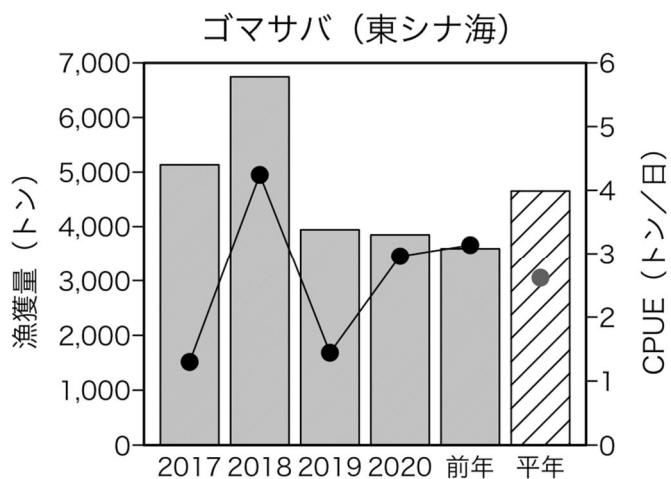
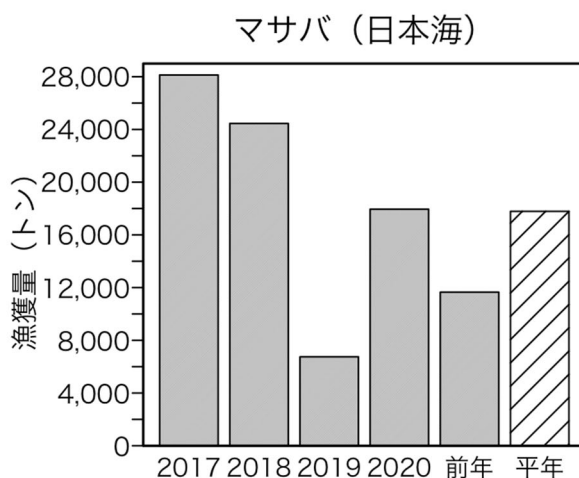
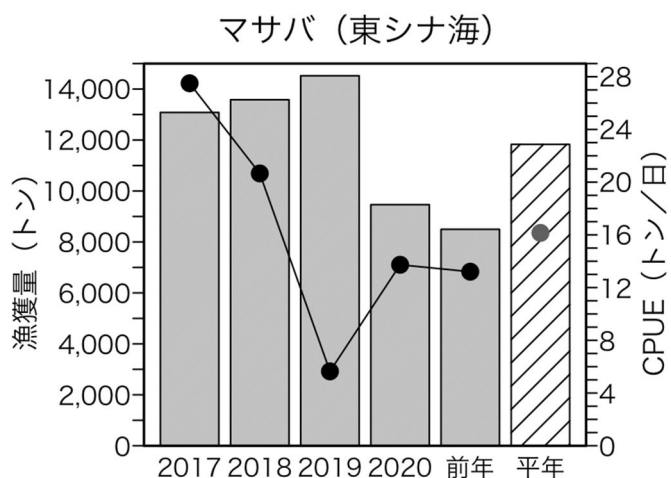
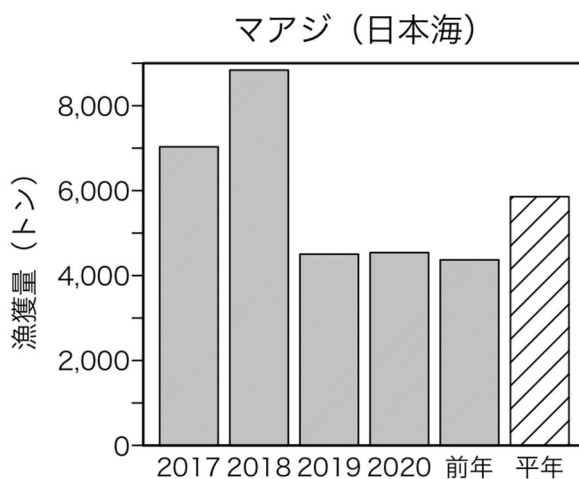
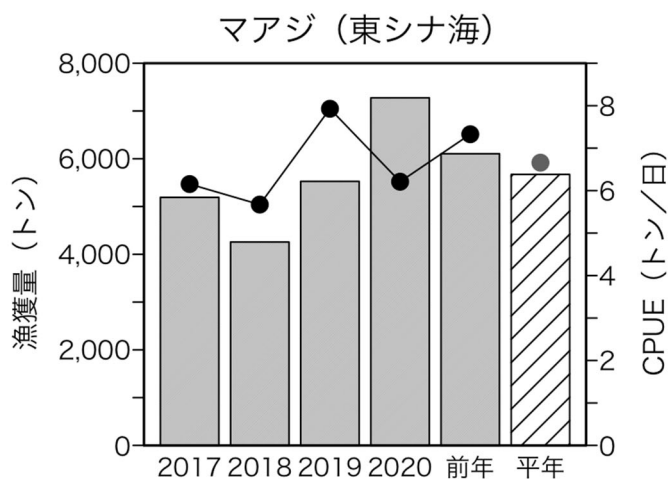
表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2022年4月～8月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は624トンで、前年並みで平年を下回った（前年比108%、平年比61%）。	漁獲量は494トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比159%、平年比77%）。	漁獲量は41トンで、前年・平年を上回った（前年比178%、平年比337%）。
鳥取	漁獲量は5,966トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比180%、平年比68%）。	漁獲量は11,230トンで、前年・平年を上回った（前年比1,109%、平年比206%）。	漁獲量は17,787トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比69%、平年比135%）。
兵庫	漁獲量は70トンで、前年・平年並みであった（前年比116%、平年比114%）。	漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比14%、平年比36%）。	漁獲量は28トンで、前年・平年を上回った（前年比1,368%、平年比2,338%）。
京都	漁獲量は312トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比184%、平年比113%）。	漁獲量は380トンで、前年・平年を上回った（前年比275%、平年比338%）。	漁獲量は367トンで、前年・平年を上回った（前年比6,036%、平年比764%）。
福井	前年・平年並みであった（前年比89%、平年比90%）。	前年並みで、平年を上回った（前年比82%、平年比218%）。	前年・平年を上回った（前年比720%、平年比949%）。
石川	前年・平年を下回った（前年比79%、平年比67%）。	前年・平年を上回った（前年比491%、平年比268%）。	前年・平年を下回った（前年比26%、平年比31%）。
富山	漁獲量は240トンで、前年・平年を下回った（前年比45%、平年比36%）。	漁獲量は1,214トンで、前年・平年を上回った（前年比410%、平年比376%）。	漁獲量は299トンで、前年・平年を下回った（前年比30%、平年比17%）。
新潟	前年・平年並みであった（前年比106%、平年比82%）。	前年並みで、平年を上回った（前年比112%、平年比121%）。	前年・平年を下回った（前年比52%、平年比53%）。
山形	漁獲量は71トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比102%、平年比128%）。	漁獲量は9トンで、前年・平年を上回った（前年比157%、平年比165%）。	漁獲量は5トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比130%、平年比101%）。
秋田	前年を下回り、平年並みであった（前年比60%、平年比94%）。	前年・平年を上回った（前年比1,204%、平年比704%）。	前年・平年を下回った（前年比17%、平年比15%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は45トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比113%、平年比150%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は616トンで、前年・平年を上回った（前年比1,140%、平年比928%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は1,246トンで、前年・平年を上回った（前年比156%、平年比121%）。

注：「前年」は2021年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

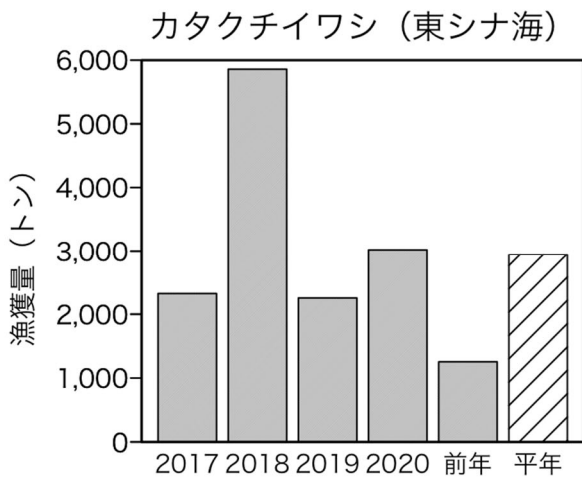
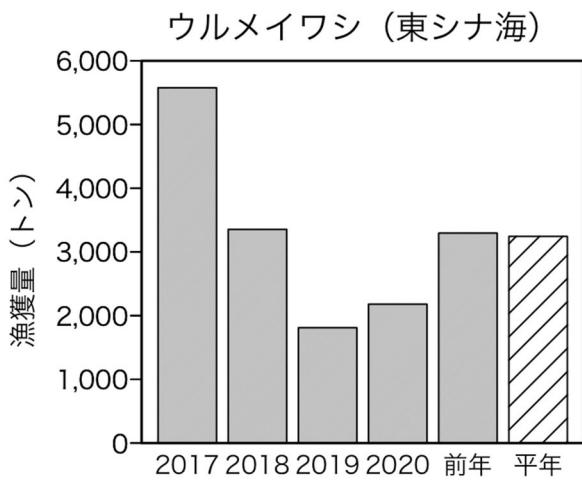
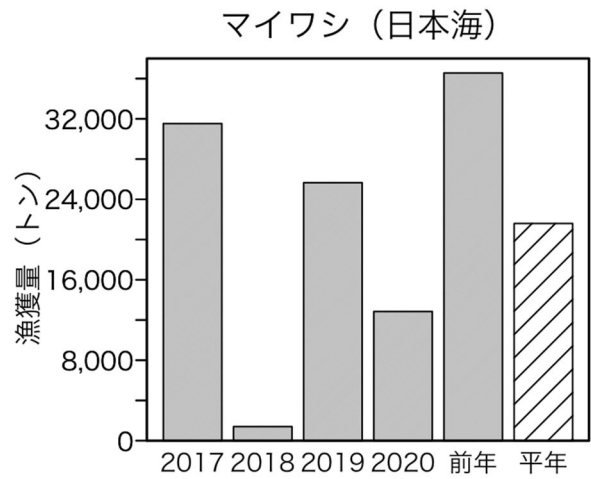
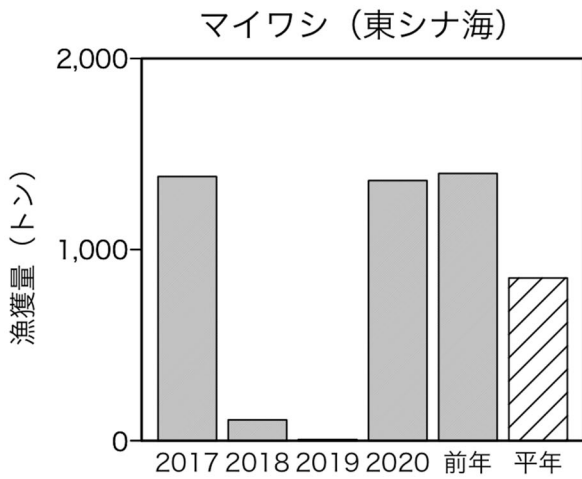
日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。





#### 今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量 (沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ) と大中型まき網の1日当たりの漁獲量 (沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量 (ゴマサバを含むが主にマサバ) の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

## 参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所